いきいき 家畜衛生ネット

第156号

2026年 秋



畜産研究所のコスモス （美咲町）

～衛 生 情 報 ～

○ 鳥インフルエンザシーズン突入!! ～発生防止に向けて～
○ 豚熱発生時の防疫措置の変更について
○ 肥育牛だけじゃない!
　母牛と子牛の健康を支えるビタミンAの役割
○ 冬に向けて子牛の下痢対策はできていますか?

～そ の 他～

○ 稲WCSを用いた乳用牛の育成について
○ 動物とヒトの間で感染する病気
　～ズーノーシス（人獣共通感染症）～



岡山県マスコット「ももっち」

＜連絡先電話番号＞

農林水産部畜産課　：086-226-7431
岡山家畜保健衛生所：086-724-3880
井笠家畜保健衛生所：0866-84-8221
高梁家畜保健衛生所：0866-22-2077
津山家畜保健衛生所：0868-29-0040
農林水産総合センター 畜産研究所：0867-27-3321

記事を掲載しています

《発行》岡山県農林水産部畜産課
https://www.pref.okayama.jp/page/detail-26074.html

鳥インフルエンザシーズン突入!!

～発生防止に向けて～

はじめに

渡り鳥が飛来する季節、すなわち高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）シーズンに突入しました。本県ではこれまで 8 農場で発生し、約 202 万羽を対象に殺処分等の防疫措置を実施しました（図 1）。令和 8 年シーズン（令和 8 年 9 月～令和 9 年 5 月）の HPAI 発生ゼロを目指し発生予防 対策の強化をお願いします。

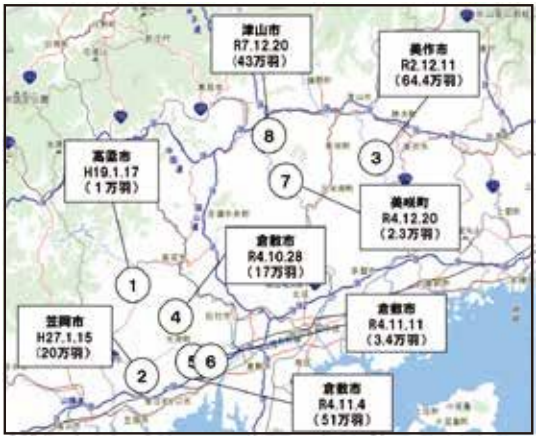


図 1　岡山県内の HPAI 発生状況

対策の内容

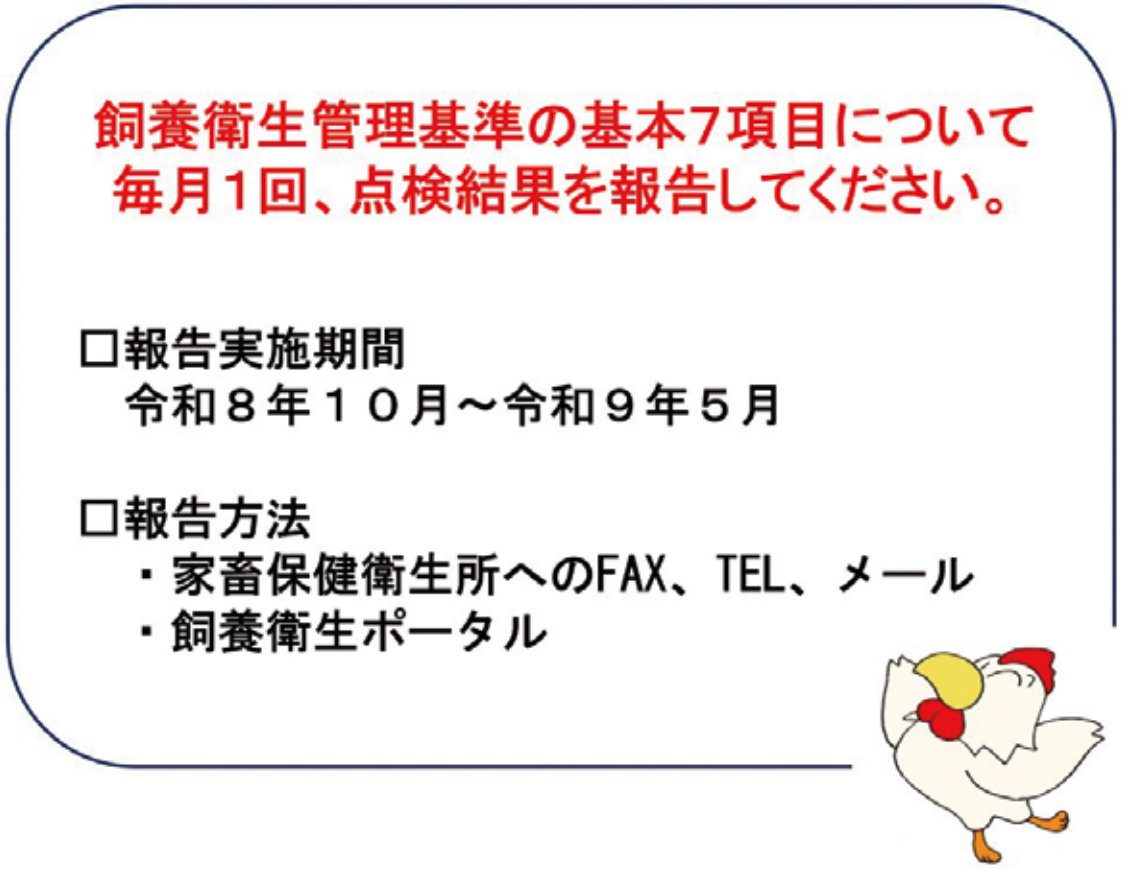
1　飼養衛生管理基準（基本対策 7 項目）（図 2）

下記に示しているのは飼養衛生管理基準の基本 7 項目です。対策が徹底できているかチェックしましょう。

□衛生管理区域に立ち入る者の手指消毒等
□衛生管理区域専用の衣服及び靴の設置並びに使用
□衛生管理区域に立ち入る車両の消毒等
□家きん舎に立ち入る者の手指消毒等
□家きん舎ごと専用靴の設置及び使用
□ねずみ及び害虫の駆除
□野生動物侵入防止のためのネット等の設置及び点検・修繕



図 2　対策のポイント（農林水産省ホームページから）



2　塵埃対策の実施

大規模飼養者（飼養羽数 20 万羽以上）は、ウイルスに汚染された粉塵、羽毛等によるウイルス伝播リスク低減のため次のような取組みを実施（図 3）。



図３　塵埃対策の例（農林水産省ホームページから）

最後に

これから本格的な鳥インフルエンザシーズンが始まります。
笑顔で春を迎えることができるよう、飼養者・関係機関一丸となって HPAI 対策に取り組みましょう。

（井笠家畜保健衛生所）

豚熱発生時の防疫措置の変更について

令和８年５月、家畜伝染病予防法が改正され（以下「本改正」）、豚熱発生時の飼養豚の殺処分対象等が大きく変更されました。変更された背景や改正点については次のとおりです。

背景

豚熱が養豚場で発生した場合、これまでは飼養豚全頭の殺処分を行ってきましたが、農林水産省が開催した専門家委員会において、これまでのワクチン接種農場における発生事例や各種実験の結果を検討した結果、**「適切なワクチン接種ができており、症状のない豚は殺処分しなくとも他の豚にウイルスを伝播するリスクにならない」**との結論に至り、本改正が実施されました。

本改正後の防疫措置について

（1）選択的殺処分

原則、殺処分は**他農場への伝播リスクとなり得る豚のみ**が対象となり（下記参照）、殺処分対象は県と国が協議の上で決定します。なお、**発生農場が自らの経営判断で殺処分対象を選択することはできません**。

＜殺処分対象となる条件＞
- ○ワクチン免疫が成立していない豚（ワクチン未接種・接種後 20 日以内・発育不良の豚・防疫措置完了までに生まれた豚）
- ○豚熱感染が確認された豚（症状があり、遺伝子検査陽性となった豚）
- ○家畜防疫員が、豚熱のまん延防止のために殺処分が必要と判断した豚

（2）消毒・緊急ワクチン接種

殺処分や死体等の処理、豚舎の消毒（3 回以上）が全て完了した時点で、防疫措置の完了となります。

＜消毒方法＞
- ○**1週間間隔で少なくとも3回以上**実施
- ○患畜や殺処分した豚が所在していた畜房は**空房**にして消毒
- ○分娩舎や離乳舎は、原則**空舎**にして消毒

＜緊急ワクチン接種＞
- ○殺処分から除外された豚は、万一の発症予防のため緊急的にワクチン接種

（3）殺処分されなかった豚の監視（約3ヵ月）

防疫措置完了後、約３ヵ月間監視プログラムに基づき監視を行いますが（下記参照）、新たな発生が確認された場合、再度防疫措置を行い、監視プログラムを適用し直します。

＜監視プログラム＞

○**移動制限**

*監視プログラム期間中であっても、**豚に症状が見られない**ことを条件に、以下の場合は**移動・出荷が可能**になります。

①出荷適期の豚のと畜場出荷

②子豚の肥育農場への移動（家畜保健衛生所の許可が必要）

③精液等の物品の移動（やむを得ない場合に限る）

○**毎日の報告**

○異常の有無

○死亡豚の頭数と、同居する豚の臨床症状

○流死産した子豚、異常産をした繁殖豚（母豚）の頭数等

発生時の出荷や移動の条件等の詳細は、農林水産省ホームページ（参照：各種リンク）よりご確認をお願いします。

最後に

本改正後の令和８年７月４日に静岡県富士宮市の農場で豚熱が発生し、初の選択的殺処分が行われました。新しい制度であるため、運用については今後整理される部分もありますが、豚熱発生時の選択的殺処分に対応した防疫計画の作成は急務です。各農場で飼養条件は異なるため、管轄の家畜保健衛生所と個々の状況に応じた防疫計画の作成をお願いします。

各種リンク（農林水産省ホームページ）

豚熱（CSF）について

（資料）豚熱発生時の防疫措置について

選択的殺処分に関するQ&A



（高梁家畜保健衛生所）

肥育牛だけじゃない!
母牛と子牛の健康を支えるビタミンAの役割

ビタミンAコントロールは和牛肥育において広く普及しており、牛肉のサシ(脂肪交雑)を向上させるためには欠かせない技術です。

ビタミンAは肥育牛の肉質向上はもちろん、母牛（肉用繁殖牛・乳牛)、子牛にとっても「粘膜の健康」や「免疫力」に影響を与える重要な栄養素です。

母牛では不足すると受胎率の低下や異常産の原因となり、子牛では免疫不全により病気にかかりやすくなってしまうなど、経営に大きな影響を及ぼします。

母牛（肉用繁殖牛・乳牛）におけるビタミンAの役割は?

母牛にとってビタミンAはホルモン分泌や粘膜の健康維持に重要です。

また、母牛の血中ビタミンA濃度は胎子の健康に直結します。

●繁殖機能の維持

ビタミンA不足により、微弱発情、無発情、排卵遅延、卵巣嚢腫などが起きやすくなり、発情や受胎率に影響します。

●流死産・異常産の防止

ビタミンAは妊娠中の胎盤の形成･維持に重要な役割があり、不足すると 流産･早産･死産のリスクが高まります。

妊娠期間中のビタミンA不足は、胎子の発達にも影響し、生まれた子牛が虚弱であったり、異常産（子牛の眼球や視力の異常、頭部の形成異常等）をもたらす可能性もあります。

●質の高い初乳

母牛の血中ビタミン A が十分に満たされていると、免疫物質が豊富に含まれた初乳が作られます。これが子牛の移行抗体となり、子牛の病気に対する抵抗力を高めます。

●乳房炎の予防（乳牛）

粘膜の抵抗力を維持することで、乳頭からの細菌侵入を防ぎ、体細胞数の改善や乳房炎の発症リスク低減につながります。



子牛における重要性

●免疫力の強化と粘膜の保護

ビタミンAには呼吸器や消化管などの粘膜上皮組織を正常に保つ働きがあります。これにより病原菌やウイルスが体内に侵入するのを防ぎ、肺炎や下痢など

の病気のリスクを低減します。

●骨格の正常な成長と発育

ビタミン A は骨の成長にも関与しています。不足すると、骨の伸びと神経の成長のバランスが崩れ、骨格の発育不全を引き起こします。

なぜ血中ビタミンAを測定するのか?

ビタミン A については「青草や良質な粗飼料を食べているから大丈夫」、「配合飼料に入っているから不足しないはず」と考えられていることもあります。

しかし、飼料中のビタミンＡは、保管状況や季節による品質の変動、個体ごとの代謝やストレスによって体内で実際に利用できる量が大きく左右されます。また、夏場の暑熱ストレスは牛の体内でビタミンＡの消費を増加させます。表１は繁殖牛の血中ビタミンＡ濃度です。

「食べている量」ではなく、「牛の血液中に実際にどれだけ存在しているか（血中ビタミンＡ濃度）を把握することが、肉質向上のみならずビタミンＡ欠乏によるトラブルを未然に防ぐ鍵となります。

表１　繁殖牛の血中ビタミンＡ濃度

正常値	潜在欠乏値	欠乏値
100～120IU/dl 最低値：80IU/dl	30～80IU/dl	30IU/dl 以下

まとめ

繁殖牛のビタミンＡ管理は母牛だけでなく生まれてくる子牛の健康と生存率にも直結しています。

母牛のコンディションを的確に把握し、「1 産でも多く、丈夫な子牛を生産する」ため、血液検査を活用してみませんか。1 頭あたり 920 円（R8 年度現在）で測定することができますので、「血中ビタミン A 濃度を測ってみたい」などありましたら、最寄りの家畜保健衛生所までご相談ください。

ただし、ビタミンＡの給与は必要量を超えて与えると、繁殖障害、骨格・関節の異常といったビタミンＡ過剰症を引きおこし、深刻な障害を与えることになります。

良かれと思って給与したことが取り返しのつかないことにもなります。ビタミン A を補給する際には、必ず診療の先生に相談してから給与するようにしましょう。

（岡山家畜保健衛生所　家畜病性鑑定課）

冬に向けて子牛の下痢対策はできていますか?

今年の冬は全国的に気温が高く、冬の訪れが遅い「暖冬」となる見込みです。しかし、暖冬が予測される一方で、偏西風の蛇行や一時的な強い冬型の気圧配置により、急に激しい冷え込みがやってくる「寒暖差」には特に注意が必要であるため、一層の下痢対策が求められます。

子牛の下痢は生死に関わるだけでなく、その後の免疫機能低下、抗病性や成長等にも長期にわたり影響を及ぼすとされています。育成期は骨格、内臓、筋肉が発達する時期です（図 1)。幼齢期に下痢を発症させない対策が、その後の治療費や投薬代の出費を減らすだけでなく、市場価格や産乳・産肉成績に大きく関わってきます。

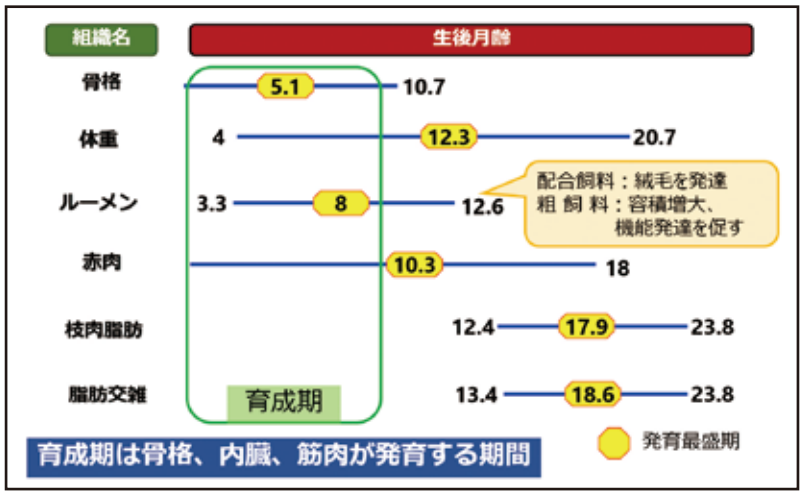


図 1　黒毛和種の産肉生理理論

（JA 全農飼料畜産中央研究所から）

子牛は環境の変化に敏感で、少しのストレスで免疫機能が低下してしまいます。免疫機能が低下すると大腸菌、ロタウイルス、コロナウイルス、コクシジウムなどの病原体の感染が原因となり、下痢を引き起こすことがあります。

そこで、子牛が下痢にならないように原因を一つでも排除して、今年の冬は下痢ゼロを目指しましょう。そのための対策を紹介するので、参考にしてください。

寒さ対策（免疫機能の維持）

1 つ目として、保温と防寒が挙げられます。子牛は 皮下脂肪が少なく、ルーメンが未熟で熱発生量が少なく体温調整がうまくできないため、寒さに非常に弱いです。体温が奪われると免疫機能が低下して、下痢の リスクが高まります。そのため冬の間は生後直ぐにカ ーフジャケットやネックウォーマーなどを着用させて 暖かく保ちましょう（写真 1)。



写真 1　カーフジャケット着用

2つ目は、敷料の増量です。おがくずやワラなどの敷料を通常より多めに敷き詰め、床面からの冷え込みを遮断します。子牛が身体を丸めて座ったときに鼻先が隠れるくらい十分な敷料の深さを確保し、常に乾燥した状態を保つことが大事です。

栄養管理対策

初乳や代用乳の管理も冬の下痢対策では重要です。可能な限り生後 12 時間以内に自力哺乳で初乳を飲ませましょう。母牛の良質な初乳を子牛体重の 10%～15% 程度飲ませることで十分な移行抗体を獲得できるといわれています。また、代用乳の温度を約 40℃に保ち、濃度を一定にすることで下痢の引き金となる消化不良を避けることができます。



写真２　代用乳を飲む子牛

軽度の軟便や下痢が見られたときは、生菌剤の添加や頻回哺乳、脱水にならないよう経口補液を与えて水分と電解質を補いましょう。

例①:1 日 2 回の哺乳を行う場合

1 日の代用乳量を 3 回に分けて頻回哺乳とする。

例②:1 日 3 回以上の哺乳（頻回哺乳）を行う場合

1 日の哺乳量は変えずに、追加で経口補液を給与する。

衛生管理対策

カーフハッチやペンの使用後は次の子牛を入れる前に消毒をしましょう。使用前に高圧洗浄機などで水洗いし、日光消毒や石灰乳塗布等を行いましょう。



母牛に分娩 2 ヵ月前と 1 ヵ月前の計 2 回、下痢予防ワクチン（ロタウイルス、コロナウイルス、大腸菌など）を接種しておくことで、初乳に含まれる移行抗体を増やし、子牛の免疫機能向上が期待できます。

最後に

子牛の下痢はその後の成長に大きな影響を与えます。今回紹介した対策を参考に冬に向けて準備をお願いします。下痢等でお困りの場合には、最寄りの家畜保健衛生所にご相談ください。

（岡山家畜保健衛生所 家畜保健衛生課）

稲WCSを用いた乳用牛の育成について

はじめに

ご存じのとおり、輸入乾草価格は高止まりが続いており、酪農経営における飼料費の割合は約 5 割を占め、経営を圧迫しています。畜産研究所では、飼料費削減による酪農経営の安定化を目的に、乳用育成牛への稲 WCS 給与試験を行いました。今回は、その試験結果をもとに稲 WCS の給与事例を紹介しますので、給与設計の参考にしていただければと思います。

試験内容

試験 1　当研究所内での稲 WCS 給与試験

●試験頭数：試験区 6 頭、対照区 6 頭
●飼　　料：試験区の粗飼料はミキサーを用い TMR 化して給与（表 1）
●調査項目：発育、飼料費の削減効果 等



写真 1　稲 WCS 給与試験の様子

試験 2　県内酪農家での稲 WCS 給与現地実証試験

●試験頭数：稲 WCS 給与区 5 頭、輸入乾草給与区 3 頭
●飼　　料：稲 WCS 給与区の粗飼料を分離給与（表 2）
●調査項目：発育、飼料費の削減効果 等

表 1　試験 1 の飼料メニュー（TMR）

8 か月齢

区分	濃厚飼料(kg)	粗飼料(kg)		
		稲WCS	チモシー	スーダン
試験区	2.0	10.5	1.1	0.4
対照区	2.0		4.0	1.0

15か月齢

区分	濃厚飼料(kg)	粗飼料(kg)		
		稲WCS	チモシー	スーダン
試験区	2.0	20.1	2.2	0.7
対照区	2.0		6.5	3.5

表 2　試験 2 の飼料メニュー（分離給与）

8 か月齢

区分	濃厚飼料(kg)	粗飼料(kg)		
		稲WCS	チモシー	オーツ
稲WCS給与区	2.0	10.0	1.8	
輸入乾草給与区	2.0		1.0	4.5

15か月齢

区分	濃厚飼料(kg)	粗飼料(kg)		
		稲WCS	チモシー	オーツ
稲WCS給与区	2.0	15.0	4.0	
輸入乾草給与区	2.0		1.0	6.6

試験結果

試験 1、試験 2 のどちらにおいても、両区間の発育に差はなく、稲 WCS 給与による発育への影響は見られませんでした（図 1、図 2）。

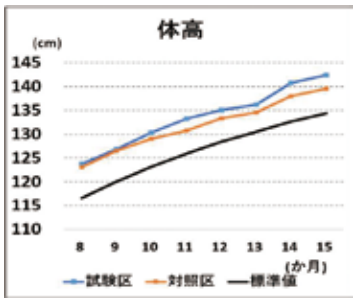


図 1　試験 1 の発育

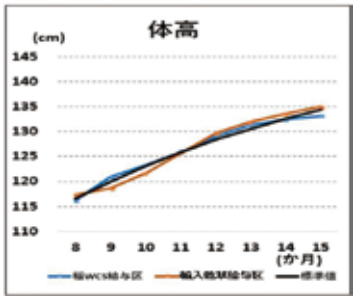


図 2　試験 2 の発育

また、1 日 1 頭当たりの飼料費は、試験 1 で 166 円、試験 2 で 118 円の削減効果が得られました（図 3、図 4）。



図 3　試験 1 の飼料費



図 4　試験 2 の飼料費

その他の調査項目では、受胎月齢は試験 1 では試験区が 13.3 か月、対照区が 13.4 か月と差は認められませんでした。試験 2 では稲 WCS 給与区が 14.0 か月、輸入乾草給与区が 15.4 か月で受胎し、稲 WCS 給与区では、輸入乾草給与区より早期に受胎しました。

稲 WCS はタンパク質含量が少ないことから、血液性状への影響が考えられる TP（総タンパク）、BUN（尿素窒素）等の項目を測定した結果、試験 1、試 験 2 のどちらも稲 WCS 給与をした区の BUN が 5mg/dl 程度で低く推移しました。しかし、発育に問題はなかったことから、牛が摂取したタンパク質が効率よく利用されたことが考えられます。

最後に

本試験における稲 WCS 給与事例を、当研究所のホームページで公開しています。試験結果の詳細が知りたい場合や、育成牛への稲 WCS 給与についてご検討される際は、畜産研究所までお問い合わせください。　（畜産研究所）

動物とヒトの間で感染する病気
～ズーノーシス（人獣共通感染症）～

近年話題のズーノーシス

動物とヒトの間で感染する病気を「ズーノーシス（人獣共通感染症）」と呼び、世界保健機構（WHO）が確認しているだけでも 200 疾病以上あります。その中でも近年話題となっているズーノーシスをご紹介します。

1　ハンタウイルス肺症候群

2026 年 4 月 6 日、大西洋航海中の豪華客船に乗船していたオランダ人男性が、ハンタウイルス肺症候群（HPS）で死亡しました。終息までに乗員乗客 13 人が感染、うち 3 人が死亡しています。HPS の原因であるハンタウイルスは、ネズミなどのげっ歯類を宿主としています。WHO は、アルゼンチンのごみ処理場に飛来する野鳥の観察ツアーに参加した乗客がネズミと接触し、その後ハンタウイルスを船に持ち込んだ可能性があると報告しています。

2　重症熱性血小板減少症候群

日本では、2013 年から重症熱性血小板減少症候群（SFTS）という、主にマダニによって媒介される SFTS ウイルスによる感染症が流行しています。流行は西日本が中心で、農作業や山林作業中にマダニに咬まれることで感染する事例が多発しています。主な症状は発熱、消化器症状、頭痛、筋肉痛で、重症例では神経症状や出血症状を伴い、致死率は 10-30% と報告されています。近年では、SFTS ウイルスに感染したペットのネコからヒトに感染した事例も報告されています。野外で作業する場合は、必ず長袖、長ズボンの着用や虫よけ剤などを活用し、感染を予防しましょう。



身近なズーノーシス

家畜や家きん、ペットの犬、猫、小鳥に由来するズーノーシスもあります。病原体は血液や唾液、尿などに含まれることがあるため、動物と接触した後は手洗いを徹底しましょう。また、野生動物にむやみに触らないことも重要です。飼養している動物が病気になった場合は、ヒトへ感染する可能性について獣医師に相談し、適切な感染予防対策を行いましょう。

（津山家畜保健衛生所）